

Title	朝鮮後期における書籍統制と民衆思想の関係についての一考察： 西学及び東学の普及と統制を中心として
Sub Title	A study on the relationship between controlled publications and popular ideas in late Chosun dynasty : the diffusion and regulation of Seohak and Donghak
Author	尹, 韓羅(Yoon, Hanna)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2007
Jtitle	Keio SFC journal Vol.7, No.2 (2007.) ,p.56- 66
JaLC DOI	10.14991/003.00070002-0056
Abstract	<p>朝鮮後期に登場した民衆思想である「西学」と「東学」に対して、当時の支配層は、これらの民衆思想が民衆運動を引き起こし、それが社会の変革につながることを防ぐために様々な統制を行った。本研究では、当時の史料に残されている事例記述などを手掛かりにして、朝鮮後期における書籍の発行・流通と統制の実態を明らかにすることで、当時の民衆思想の普及にとって書籍がどのような役割を果たしたのかを考察することにした。</p> <p>Several types of control had been introduced by the Establishment to prevent the social transformation led by the popularization of "Seohak" and "Donghak" appeared in the late Chosun period. In this research, I have analyzed what measures were chosen and exercised by the Chosun Dynasty in the purpose of controlling common thought by describing how the publication and distribution of books are regulated in the late Chosun period. This analysis is based on the literal descriptions found in historical materials.</p>
Notes	自由論題 研究論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-0702-0500

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

◆研究論文◆

朝鮮後期における書籍統制と 民衆思想の関係についての一考察

西学及び東学の普及と統制を中心として

A Study on the Relationship between Controlled Publications
and Popular Ideas in Late Chosun Dynasty
The diffusion and regulation of Seohak and Donghak

尹 韓羅

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程

Yoon Hanna

Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University

朝鮮後期に登場した民衆思想である「西学」と「東学」に対して、当時の支配層は、これらの民衆思想が民衆運動を引き起こし、それが社会の変革につながることを防ぐために様々な統制を行った。本研究では、当時の史料に残されている事例記述などを手掛かりにして、朝鮮後期における書籍の発行・流通と統制の実態を明らかにすることで、当時の民衆思想の普及にとって書籍がどのような役割を果たしたのかを考察することにした。

Several types of control had been introduced by the Establishment to prevent the social transformation led by the popularization of "Seohak" and "Donghak" appeared in the late Chosun period. In this research, I have analyzed what measures were chosen and exercised by the Chosun Dynasty in the purpose of controlling common thought by describing how the publication and distribution of books are regulated in the late Chosun period. This analysis is based on the literal descriptions found in historical materials.

Keywords: 書籍統制、民衆思想、東学、西学

1 はじめに

朝鮮後期における社会変動の要因については、これまで、西学（カソリック）の普及がもたらした思想的影響や、「東学党の乱」につながった東学思想の登場と普及過程が個別に研究されてきた。しかしながら、これらの思想が、既存の社会秩序の中で、どのような手段を通じて民衆の中に普及していったのか、それに対して既存の社会秩序を支える支配層がどのような方法で統制を図ったのかについては、ほとんど明らかにされていない。

朝鮮で出版事業が拡大・発展したのは、金属活字発明以降の李朝時代であった。太宗時代の1403年には「鑄字所」が設けられ、1418年に世宗が王位について後、出版は国家事業の重要な一部門となり、それ以降、出版物＝知識の普及は国家の管理下にあった。ところが、その後、戦乱による国力の衰退などによって国家の統制力が弱まり、16世紀半ば以降、民間の手で発行される坊刻本などが普及し始めると、様々な知識が人々の間に広まるようになった。このことに加えて、朝鮮後期（17世紀後期～19世紀初期）になると、両班・中人・良民（常人）・賤民の四階層からなる厳格な身分制度が崩れ始め、民衆思想が登場し始めた。その契機の一つは、書籍の普及などによって都市に流通する情報量が増大したことであった。

朝鮮後期に書籍を通じて普及した代表的な民衆思想は、聖書を媒体として普及した「西学」（カソリック）と、その後、末世思想を王朝交代の運教と結びつけた秘記「鄭鑑録」の影響を受けて登場・普及した「東学」である。当時の支配層は、これらの民衆思想が民衆運動を引き起こし、それが社会の変革につながることを防ぐために様々な統制を行った。書籍に対しても、例えば西学の統制のために、当時の支配層にとって都合の良い思想である儒教関連の出版物を増やす、海外から輸入される書籍を制限する、西学関連の書籍を所有する人々を処罰する、といった方策を講じている。

これまでの研究では、西学、東学などの民衆思想の普及と民衆運動との関係が個別に追究されてきて

おり、また、朝鮮時代の書籍に関する研究は蔵書政策に関するものに偏っているため、書籍統制に関する研究は皆無に近い状況である。本研究では、こうした個別に行われてきた先行研究を再評価しつつ、当時の史料に残されている事例記述などを手掛かりにして、朝鮮後期における書籍の発行・流通と統制の実態を明らかにすることで、当時の民衆思想の普及にとって書籍がどのような役割を果たしたのかを考察することにした。

2 朝鮮時代前期(14世紀—17世紀初期)における出版事業の登場と発展

朝鮮では、朝廷によって、太祖元年(1392年)に官営の印刷所である校書監、太宗即位年(1401年)に校書館、太宗3年(1403年)に鑄字所が設置され、書籍の刊行・配布が行われた(百済官・夫吉萬、1992、p.48)。高麗時代末に開発された金属活字の鑄字は、朝鮮時代には銅活字へと発展したが、朝鮮初期の銅活字は技術的に未熟であったため、銅活字が鑄字所で製造された十余年後の太宗12年(1412年)になってようやく銅活字を使った書籍である「經濟録錢詳節」と「續集詳節」が刊行された(百済官・夫吉萬、1992、p.48)。

世宗大王在位期間(1418—1450)以降には、庚子字と甲寅字が製造され、活字印刷能力は一日数枚程度から数十枚を印刷できるまで向上した。しかし、朝鮮時代の活字印刷による書籍発行部数はそれほど多くはなく、一冊の書籍について50—100部程度発行されるのが通例であった(韓亨埈、1987、p.440)。そのため、全国に配布する場合は、活字印刷ではなく板刻印刷によって発行された。世宗13年5月に鑄字所で印刷された「直指方」、「傷寒類書」、「補註銅人經」のような義方書(医学書)は鑄字で印刷されたが、「補註銅人經」(経典)は絵や図形が挿入されるため、鑄字で印刷するのは困難であり、材木の多い慶尚道において木版で印刷された。活字のみで図書を印刷できない場合は、活字で何部かを印刷し、それを地方官署で木板に写させて刊行させた。このように活字印刷技術が普及していなかったため、朝鮮朝の図書の版本はほぼ板本であった。

当時、朝鮮王朝が、儒教理念の普及と強化のための手段として、教育と共に重視したのは出版事業であった。主に経典を刊行するため、校書館、芸文館、成均館の3館を設置して朱子学書籍の刊行に力を注いだ。朝鮮王朝の出版政策の方向と目的を知るためには、図書目録を調べる必要がある。太祖3年(1394年)から太宗18年(1418年)までの間、官庁で刊行された図書目録(金斗鍾、1981、p.232)、紹修書院で分刊された図書目録(李준희、1984、p.19-24)、白雲書院を含む主要書院で分刊された図書目録¹、英祖(在位1724-1776)時代の官庁で刊行された目録(鄭형우、1983、p.146)等を見てみると、そこに掲載されている図書は経書と朱子学の本ばかりである。このような書籍を刊行・普及させることにより、儒教崇拜政策を固めることで官僚制度の基盤を固めようとする意図が伺われる。

朝鮮時代の本は(ここでは王朝主導の活字印刷本)、漢文を読み解くことのできる両班だけが読めるものだった。両班を中心とする朝鮮の支配階層は、国の統治理念や政策を知らしめる上で、本を作り人々に読ませることが重要なことであると考え、「校書館」という官府をおき、儒教関係など重要な本の収集、必要な本の製作・管理・保管・販売を行った。しかし、「大学」や「中庸」のような儒学の本は、一冊の価格が米一斗以上するなど、一般の民衆にとっては極めて高額であった。そのため、校書館で本を

買うことができる人は支配階層であった両班²だけであった。その上、多くの部数を刷らなかつたため、漢文を知っていて経済的に余裕のある人でもなかなか思うように本を入手することができなかつた。(朴垠鳳、1999、p.100-102)。

3 朝鮮後期(17世紀後半-19世紀初期)の社会変動と出版

朝鮮王朝時代の身分制は、両班・中人・良民(常人)・賤民の四階層からなる。士族ともいわれる両班は支配階層であり、官僚ないしその子孫から構成されていた。中人は科挙の雑科及第者とその一族であり、中下級の技術官僚層であった。被支配層は良民と賤民であるが、前者は主に軍役からなる良役(徴兵・労役ないしそれに代替する布の納付義務)を負担する階層、後者は奴婢として官宇や両班に直接に隷属する階層であった。しかし、良賤制を除き、これらは法的に規定されていたわけではない。慣習上、賤民は奴婢だけを指すのではなく、七般公賤(妓生・内人・吏属・駅卒・牢令・官婢・有罪逃亡者)・八般私賤(僧侶・令人・才人・巫女・捨堂・拳史・白丁・鞋匠)と呼ばれた雑多な職種を含んでいた。

朝鮮後期になると厳格な身分制度が崩れ始め、民衆思想が登場した。支配層の教養とされた学問や芸術が次第に被支配層に影響を与え、両者の融合・反発が起きたが、その契機の一つは、書籍の普及によ

表1 朝鮮における印刷技術の発展

610	曇微、日本に渡り紙、墨、彩色法を伝える。
704	世界最古の木版印刷「無垢浄光大蛇羅尼經」「元曉」等仏経典の大量印刷。他に歴史書、中国書の翻訳等。
11C ~	精巧で精密な高麗紙の製造が盛ん。「臨川閣」「史庫」(図書館)が存在
1236 ~	「八万大藏經」の発行(世界最古の板本)
1392	世界初の金属活字(鉛、真鍮)の発明、李王朝の官報「朝報」の登場(1234年の高麗の法典「詳定文」が初の金属活字印刷だとする説もある)。
1403	太宗、鑄字所(官営の印刷所)設置
1434	銅(亜鉛、銀、鉄、錫混合)活字の発明、組版技術=大量印刷技術の確立。「国朝宝鑑」「貞観政要」等歴史書をおもに印刷。
1443	世宗と学者らが訓民正音(民を導く文字)ハンゲル文字28字を創製。
1578	「朝報」をまねた史上初の民間人新聞誕生、宣祖国王の怒りをかいすぐに発行停止。
1596	壬辰・丁酉の倭乱(秀吉の朝鮮出兵)で膨大な量の金属活字が持ち去られる。鑄字作成は急を要し、苦肉の策として木活字が製造される。これを訓練都監活字という。
1772	「文献備考」印刷のため5ヶ月で15万個の活字鑄造。高水準鑄字技術。

(井上1993 p.72-75 及び任正ヒョク1993より抜粋し作成)

り都市に流通する情報量が増大したことであった。もっとも、16世紀まで印刷は王権下にあり、更に朝廷から国家が出版した本を無料で受け取ることができる領賜制度は両班だけの特権であったため、一般民衆が簡単に手に入れられる本は活字印刷本ではなく、手で書き写した筆写本であった。一般民衆が印刷（ここでは活字印刷本ではなく板本）された本を手軽に購入できるようになったのは壬申倭乱の後、17世紀以降であった。この頃になると、個人が板本印刷施設を所有するようになり、本が多く出回り始めた。その理由として、戦乱で燃やされた重要な書籍を復元するには王朝の活字印刷技術では間に合わなくなり、民間の板本印刷で補うことを命じたことが一つの理由である。更に、戦乱によって王朝の出版統制力が低下したことも重要な要因であった。

こうした状況下で登場した民衆主導の出版物を「坊刻本」という。「坊刻本」は主として『千字文』『童蒙先習』のような子供学習教材、科挙試験準備のための経書、歴史書、詩文集、日常生活に必要な礼儀規範書、医術に関する本、農業書、『九雲夢』などの小説であった。個人文集や族譜なども、財力がある人は印刷施設を設置して出版していた（朴垠鳳、1999、p.100-103）。

しかしながら、坊刻本の刊行時期は明確に究明されていないため、刊行された時期については様々な説がある。その内、最も有力な説は、1576年に刊行された『고사촬요攷事撮要』を起源とする千恵鳳（1995）の説である。この主張は「攷事撮要」の最後の章に記入された「1576年7月、ソウルの水標橋下の北辺の二第里の入り口にある河漢水家に木版で刷った本があるので必要な者は取りに來い」という

刊記を基にした説である。坊刻本は朝鮮朝中期（16世紀後半）から近代的な活字印刷術が現れる前に木版印刷で作成・販売されており、最初の頃は、王権が主導する官版本の発行数量の不足分を埋める役割を果たしていた。しかし、官版本が除外していた児童教育書、一般大衆用の参考図書、娯楽小説へと徐々に刊行対象を広げていき、庶民の文化欲求・知識欲求に応えたことは高く評価されている。更に、坊刻本小説は、パンソリ³等の「語り」や「歌」を通して伝達されていた情報を文章化して庶民に供給したという点で、近代大衆文化を出現させたとも言える。

坊刻本が誕生した16世紀前後の朝鮮社会では、北京との間を往来していた朝鮮の使臣たちが持ち込んだ西洋文物が伝播し始めていた（林亨尙、1970 p.5）。政治的には、初期の厳格な身分制度が崩壊し始め、特に土地制度、徴税制度、徴兵制等の基盤の崩壊が顕著であった（韓沽勳、2001、p.348-349）。政權掌握をめぐる争いは、宣祖（1552 - 1608）8年（西暦1575年）に官僚の派閥である東人と西人の分裂で始まり、朝鮮朝の政治が混乱するきっかけとなった。壬辰倭乱と丙子胡乱（後金＝清朝の朝鮮侵略）を経て、民衆の間では伝統的価値規範に対する批判意識が生じ、実学と民本思想が登場した。また、朝鮮後期になるにつれて、商業と農業を基に富を築いた新興資本階級の身分上昇が起こり、哲宗（1831 - 1863）9年（1858年）には、両班層が全人口の70%に達し、事実上、身分制度は崩壊していた（邊太燮、1986、p.350）。朝鮮朝中期以降に起きた人口の増加と農業人口の都市への流入は産業発展の基盤を整え、商品及び貨幣経済の発達を促進した。

表2 朝鮮後期大邱地方の身分変動（単位：％）

年 代	両班戸（ヤンバン）	平民戸	奴婢戸（ノビ）
1690	9.2	53.7	37.1
1729	18.7	54.7	26.6
1783	37.5	57.5	5.0
1858	70.3	28.2	1.5

（邊太燮 1986 p.351）

表3 坊刻本の時代別区分

年代	ジャンル	種	人口
1576 - 1686 (出現)	教育分野	8	増加
1725 - 1909 (全盛期)	娯楽、小説などが多く出現	72	最大
1910 - 1929 (後退期)	娯楽機能強化、実用性拡大	22	減少

(夫吉萬 2003 p.34)

朝鮮後期になると平民の数が減少し、両班が増加した。これは、従来の農民層と両班層内で経済的階層分化が起き、従来の身分的支配の維持が困難になったことから生じた社会変動である。つまり、富を築いたノビと平民が、平民と両班へと身分を昇格させ、支配層が急増し被支配層が急減したのである(邊太燮、1986、p.350)。このような階層変動についての全般的な統計調査はないが、表2のように、大邱地方を対象に調査した身分上の人口変動資料を通して、朝鮮後期全体の身分変動状況が推測される。17世紀後半では10%にも満たない両班戸数の比率が、18世紀後半には37.7%と上昇し、1856年には70.3%⁴に急増した反面、平民とノビ、特にノビの数は同期間に37.1%から1.5%まで急減している。

このように、王族とノビ以外は両班という状況下で、事実上の支配層は王族と一部の高級官吏であったことから、この時期の両班を朝鮮前期の両班階級と同等視することは難しい。そのため、本稿では被支配層の読者人口が急増したという見方をしている。

4 朝鮮後期における民衆思想と「西学」の普及

18世紀以降、朝鮮後期の思想界では、国の統治思想としての性理学⁵である「正学」と先秦儒教を基礎とする「実学」が流行し、加えて、既存の思想界に対する民衆の反発に応える民衆思想が登場していた。このように、朝鮮後期の思想界には多元化現象が起り始めていたが、性理学は、依然として朝鮮後期の支配層・知識層にとっての基本思想であり、政治や実社会の様々な場面に大きな影響力を有していた。

しかしながら、この時期の性理学は統治イデオロギーとしての機能は失われつつあった。知識層の一部は、改新儒学の一つである宗明理学に基づいた朝鮮性理学の思想体系に関する再検討を行い、その結果、性理学の代理をなすものとして生まれたのが「実学」であった。実学は性理学と同様に儒学を基礎としているが、性理学とは異なり先秦儒学に基づく新たな思想体系を形成しようと試みている。しかし、実学は当時、知識層に歓迎された訳ではなく、実学者らも実学を基に改革勢力を形成しようとは思わなかったため、当時の社会変革のイデオロギーにはならなかった。

他方、朝鮮王朝や封建体制を否定する新たな思想が朝鮮後期社会に出現した。このような思想全てを性理学界・実学界は「邪学」と見なし排斥した。当時邪学として規定されていたのは伝統宗教思想や新興思想であった。伝統宗教思想としては、仏教・道教及び民衆宗教が挙げられる。仏教は朝鮮王朝が成立した当時から邪学として排斥されていたが、朝鮮後期には仏教関係者による信仰普及運動や仏教復興運動が起きていた。そうした中、仏教界の一角では彌勒信仰運動を通じて反王朝的立場が示された。更に、民衆信仰が以前にも増して広まり、民衆は信仰を通して朝鮮王朝の持続性を疑うようになった。こうしたことから、邪学は支配層から性理学ないし儒教的価値体系に対する挑戦と捉えられた。

カソリックが朝鮮に本格的に紹介されたのは、17世紀、中国との間を行き来していた使臣達によってである。彼らによって紹介されたカソリックは、当時は「西学」と呼ばれ、学問として研究された。それが18世紀後半からは、信仰として受容されることになった。最初は西学を研究していた両班や中人

(中間階級で、主に技術職・事務職)を中心に信仰されたカソリックが、徐々に一般民衆にまで広まるようになった。

朝鮮では、豊臣秀吉が朝鮮を侵略した1592年—1598年以前を朝鮮前期、それ以降を朝鮮後期と呼んでいる。朝鮮後期の大きな社会的特徴の一つとして、西洋の存在を知ったことが挙げられる。1601年に宣教師として初めて中国への入国に成功し、北京で宣教活動をしていた、漢字名で利瑪竇と呼ばれていたマテオ・リッチ(Matteo Ricci 1552—1610)の著作と世界地図を通じて、朝鮮は初めて西洋と接したのである。彼の著書で言及されている「天主實義」は、中国人(中士)と西洋人(西士)との問答形式(catechism)からなる天主教の教理書で、1603年中国で公刊された。この本は中国ばかりでなく、朝鮮でも学者たちの間で広く読まれ、天主教に関する基本文献となった。この著書の中でリッチは、儒教の古典でいう「上帝」は「天主」(Deus)と同じだと主張しながら、主たる批判の矢を仏教に向け、朱学=程朱学に対してもその無神論的な太極理気説は、先儒(先秦儒教)が人格神として認めた「上帝」説を歪曲したものだとして攻撃した(姜在彦、1994、p.19-20)。

儒教の古経にいう「上帝」と、「天主教」でいう「天主」とは同じだとする説は、実は、リッチが属していたイエズス会が儒教との衝突を避けて、中国の儒者たちと反仏教のために共同戦線を組むために考案した、儒学の教えを守るための補儒論的な教理解釈である。「天主実義」の中で説いた補儒論的な教理解釈は中国の士人層の一部から支持を受け、その例えは明末に漢訳書によって、西洋の天主教、数学、天文学、暦学、地理学その他を紹介する上で大きく貢献し、徐光啓(1562—1633)や李之藻(1565—1630)等の優れた学者達を改宗させることになった。また、リッチは徐光啓と李之藻との共同作業によって西洋の天主教や科学に関する多くの漢訳書を刊行し、毎年北京との間を往来した朝鮮の使臣達(燕行使)は、その漢訳西洋書を朝鮮にもたらした(姜在彦、1994、p.20-21)。

漢訳西学書の輸入は、1601年(宣祖34年)、許

筠(1569—1618)によるとされているが(高柄翊1970)、1603年(宣祖36年)、李光庭(1714—1789)によって「天主実義」と「交友論」及びリッチの「坤輿万国全図」(1602)が輸入されたことが西学の本格的な紹介の始まりとして知られている。漢訳西学書の輸入は朝鮮後期の社会に西学の流行をもたらし、李暉光(1563—1628)、李瀾(1681—1763)、安鼎福(1712—1791)、朴趾源(1737—1805)、丁若鏞(1762—1836)等は西学に関する研究を深め、朝鮮後期の儒学者たちに衝撃を与え、知識・思想面での朝鮮社会にも大きな影響を及ぼした(百楽溶、1935;崔韶子、1987、p.285-292;李元淳、1975、p.45)。

このように、初期の西学は、李元淳が「明末から清初にわたり儒教的漢字文化世界で漢族社会からカソリック普及に携わっていた西洋聖職者が漢族にカソリックを伝教する一方、西洋文明を伝えるために西洋の宗教・倫理と地理・天文・数学・科学と技術関係の書籍を漢文に翻訳又は著述した書籍」(李元淳、1986、p.81)と定義したように、漢訳本の形で朝鮮にもたらされた。漢訳西学書は朝鮮で流通し、後に西学が宗教運動化するにつれて、読者層を広げるためにハングルへと再度翻訳された。そのため、1787年以降、朝廷によって禁書処置対象とされた西学書には、ハングル翻訳本や解説書が含まれることになった。

5 「東学」思想の登場・普及

日本近代史の叙述では、日清戦争の原因を語る場合、必ず「東学党の乱」が登場する。しかし、「東学党の乱」とは、「東学党」だけによる排外的な宗教戦争ではなく、農民が反侵略・反封建の階級的な要求を掲げて戦った農民戦争である。その前段階での局地的な農民一揆が全面的農民戦争に発展しえたのは、地域性を越えた東学思想が農民層に浸透し、その秘密結社が農民蜂起と結合したからである。

東学思想は、1860年4月、慶尚道慶州の没落した両班出身である崔濟愚によって創始された一種の民衆宗教である。当時朝鮮の封建社会は、社会経済的にも思想的にも内部矛盾を露呈し、重大な危機に陥っていた。東学思想は、危機を救う能力を失った

儒教及び仏教に反対し、西学（天主教）に対抗する民衆宗教として登場した。1860年前後、ヨーロッパ列強は中国に対して天主教の浸透をはかり、宣教師と現地人とのトラブルを利用して武力による露骨な侵略が強行されていた。中国とは唇齒の距離にある朝鮮においても、西学（天主教）が、国内に潜行していたフランスの宣教師たちによって次第に根を張り始めていた。東学思想はまず、西学の浸透に対抗して、その名を東学と名乗った。崔濟愚は『東学大典』の「論学文」の中で、東学が西学と違うことを強調して、「われまた東方に生まれ、東方に受く。道は天道といえども学は東学である」と述べている。更に彼は、同じ書の「布徳文」の中で中国のことに触れ、「西洋はたたかえば勝ち、攻めは取り、ならざることがないというのに、天下が減じればまた、唇がとられた歎き（つまり、唇齒の関係にある中国がほろぶならば、朝鮮も安泰ではないという意味）無しとはいえない。保国安民の計が、将来いかに案出できようか」とも述べている（姜在彦、1998、p.122）。このように東学思想は、ヨーロッパ資本主義列強の侵入に反対する反侵略的教理として登場したのである。

東学思想の特徴は、「人はすなわち天」（人乃天）、「人につかえるに天の如くせよ」（事人如天）がその教理の核心となっていることである。これは、貴賤の別が先天的に運命付けられていると説く封建的身分制度を否定する人民平等思想である。二代目教祖の崔時亨は、「天道教書」の中で次のように指摘した。「天はすなわち天であり、天はすなわち人であるから、人乃ほかに別に天はなく、すなわち心にある。故に心すなわち天であり、天すなわち心である。」ここでいう「人すなわち天」という思想には、当時の朝鮮社会において、封建的特権階級である両班による常民や賤民に対する非人間的な虐待と迫害への抵抗の姿勢がみられる。とりわけこの天人一如の思想は、キリスト教や仏教のように、代天者（偶像）を通じて神に接し、人間が神に帰依する存在としてではなく、「人すなわち天」とであると宣言することによって、現世に「地上天国」を実現するという現世主義である。

他方、東学の統制としては、当時の封建政府によっ

て邪教異端の唱導者崔濟愚は逮捕され、1864年に大邱将台で斬刑に処された。その後、東学徒に対する官憲の弾圧が激しくなったばかりでなく、地方官吏は一般農民にまで「東学徒」のレッテルを貼ることによって迫害と収奪をほしひまにした。崔濟愚が処刑されたのち、その教統を受け継いだ二代目教祖崔時亨は、深山幽谷を転々としながら東学布教に努め、また、第一代教祖崔濟愚の罪名を取り消すための教祖伸冤運動（伸冤＝無実の罪をはらす）を繰り広げた。このときから、東学徒は強硬な秘密結社による集团的勢力となり、その運動も次第に権力と対決する政治的性格を帯びるようになった。崔時亨は、まず1880年に江原道麟蹄郡甲遁里に刊行所を設け、文才はなかったが、驚くべき記憶力で東学の経典である『東経大典』及び『竜潭遺詞』を口述し、文才のある人に代筆させて刊行した。というのは、崔濟愚が処刑された後、これらの文書が禁書になっていたからである。また1883年にも忠清道木川郡区内里に刊行所を設けて経典の刊行を続けた。

このようにして東学の教勢は、慶尚、全羅、忠清の三南地方をはじめ、京畿、江原、黄海道の各道に広まった。とりわけ、政府と地方官吏による弾圧と迫害に抗して、東学の組織網を整備する上で重要な意味を持ったのは、1884年の六任制度の確立であった。同制度は、教長、教授、都執、執綱、大正、中正の任命基準と、教務の分担を決めたものである。そして東学の末端組織としては「包」があり、その上に位置していくつかの「包」を管轄する「接」が、後に農民軍の組織単位として導入されたばかりでなく、その接主が農民軍の指導者となったのである（姜在彦、1998、p.125）。

6 書籍統制を通じた民衆思想の統制

どんな社会であっても、文化が興隆する時期は、必ず流通する情報量の増大が伴っている。他方、文化が停滞する時期は、それを抑制する政治が行われている時期でもある。朝鮮後期の社会変動期には、社会構造が不安定になり、それに共鳴した民衆心理に伝えるかのごとく、様々な流言飛語や民衆信仰が流行り、従来の秩序が脅かされることとなった。朝

鮮王朝は、思想的支柱である朱子学に対抗する民衆思想の伝播を防ぐため、国の統治思想である性理学を揺るがす思想を含む書籍に対して統制を加えた。このような仕組みが「禁書」の原因となったが、その時々、社会的混乱の程度により、「禁書」の種類や範囲が異なっていた。

禁書処置は、朝鮮時代を通して統治手段として用いられていた。世祖朝(1455 - 1468)3年(1457年)には、各種の秘記と図讖説が流行して社会が不安定になったため、朝廷は八道觀察使⁶に秘記の統制を命じた。この時、禁書とされた主な書籍は秘書、西洋書、カソリック系の書籍であった。具体的な書籍名としては、『古朝鮮秘詞』、『大辯説』、『周南逸士記』、『誌公記』、『表訓三聖密記』、『安舎老』、『元董仲三聖記』、『道證記』、『智異聖母』、『河沙良訓』、『文泰山王居仁薛業等三人記録』、『修撰企所』、『動天録』、『磨風録』、『通天録』、『壺中録』、『地華録』、『道洗漢都讖記』等が挙げられる(『世祖実録』巻7)。反儒教的な書籍に対する統制は睿宗朝(1468 - 1469)(『睿宗実録』巻7)と成宗朝(1469 - 1494)(『成宗実録』巻1)でも行われた。民間信仰の福音書であった「鄭鑑録」のような書籍は、歴代の王権支配勢力によって禁書処置の対象となった。

18世紀には、カソリック関連書籍は代表的な「禁書」とされた。この時期の朝鮮では、カソリック信仰の流行は性理学中心の思想と社会秩序に対する挑戦であった。そのため、朝廷ではカソリックに対する禁圧政策を推進し、正祖は“人は人らしくし、本は燃やす”(人其人火其書)という政策を推進した(趙光、1998、p.179)。

正祖朝(1776 - 1800)から純祖朝(1800 - 1834)に行われたカソリック迫害は、カソリック教徒の処刑、カソリック関連書籍の焚書という形で行われた。

カソリック信仰者の増加に対して、一部の強硬な儒学者は、以下の記述のように、西学の根絶のためには異端邪説の伝播の重要な手段である西学書を根絶しなくてはならないと主張した。「…西洋之書、始自雲臺象胥之輩、流出有年、而註誤日甚、寔繁有徒。所謂其道也、只知有天、不知有君親、且以天堂地獄之說、誣惑世、害甚洪水猛獸。…自五十年前、

始於沿海一邑、至尙、善等州、家奉戶祠、自二月至于月終、廢農務、謝人客、妖邪妄誕、甚於巫覡。亦令道臣、曉諭禁斷…。」(『正祖実録』巻19)、「…方今聖明臨御、凡所以化俗之方、靡不用極、而獨彼一種邪學之徒、自京而鄉、如火潛燃、塞其源人其入之道、莫若火其書之爲愈也。臣謂令坊里、眞諺翻騰、咸收付丙。深望亟降明命焉…。」(『正祖実録』巻54)。

以上の史料にも記されているように、当時、西学の初期の流布範囲は両班に限られていたが、1784年を境にカソリックが本格的に受容されたことで、農夫、地方の民や婦女子そして子供にまでカソリックの影響が及び、漢文本だけではなく、学識の無い民衆にもカソリックを普及するためにハングルに翻訳した書籍が出現した。

西学が両班階層から女子を含む中人以下の階層に拡大するにつれて、漢訳西学書よりもハングル訳の西学書が必要になってきた。ハングル訳西学書がいつ現れたのかの正確な年代は不明だが、以下に挙げる正祖12年(1788年)の史料にハングル教理書に関する問題が論じられていることから、それ以前に教理書の翻訳が始められていたと推測できる。「…今俗所謂西學、誠一大變怪。…雖至愚田氓、沒知村夫、諺謔其書、奉如神明、雖死靡悔…。」(『正祖実録』巻26)。

また、自らカソリック書籍を流通させ販売していた人物である鄭光受が、憲宗元年(1801年)辛酉迫害時に尹鉉の家に隠していた書籍90種のうち、ハングル本が55種に上っている点から、教会創設直後から翻訳事業が活発であった事が窺える。ハングル翻訳本としては、崔昌顯が翻訳した『主日斗祝日聖經の解説』⁷の他、『聖教淺説』、『聖經廣益』、『教要序論』、『萬物眞源』、『玫瑰經十五端』、『黙想指掌』、『三本問答』、『受難始末』、『天主教要』、『天主聖教日課』、『十戒』、『念珠黙想規程』等があった(姜惠英、1990、p.140)。翻訳されたカソリック書籍は、筆写又は木版印刷によるものであった。辛亥珍山事件⁸をきっかけとして、朝廷では、次に挙げるように、全国を対象として西洋書を持っている者は官に自首するよう命じ、同時に、カソリック系邪書を捜索し焼却するよう命じた。「…蓋此西學、淺近謊怪、不足爲識者之

所漸染、而向來聖教、…及今痛禁、在所不已、而燕購之路既斷、則前此出來、似無多本、嚴飭京兆及諸道、定其日限、收聚燒火…。」(『正祖実録』卷26)。この時焼却された書籍は、「外奎章閣形止案」によると、『濼罪正規』、『玫瑰十五端』、『達道記言』、『聖道記言』、『聖記百言』、『泰西人身概説』、『度海苦積記』、『主教縁起總論』、『畏天愛人極論』、『警学』、『悔罪要旨小引』、『童幼教育』、『聖水記言』、『齋克』、『進呈書殺』、『修身西学』、『眞福訓全總論』、『仁會約』、『勵学古言』、『西洋統領公沙忠記』、『靈魂道體説』、『清凉山志』、『寰宇始末』、『天主聖教四末論』、『主制群徴小引』、『眞福直指』、『斐録答彙』、『天主絳生言行記略』、『齊家西学』の27巻48冊であった⁹。

西学に対する統制は、書籍の輸入と刊行及び翻訳を禁じる二つの方向に分けて実施された。西学書は毎年使行員によって輸入されたが、西学書は、一般民衆に普及させるために漢文本とハングル本、筆者本と板本など相手に合わせて刊行されていた。正祖8年(1784年)前後には、信徒等が主に漢訳西学書を通じてカソリックに接していた。明・清180年間に漢訳された西学書は358種以上と集計されているが、純祖元年(1801年)までに朝鮮に120種以上のカソリック書籍が輸入された(裴賢淑、1981、p.41)。

朝廷がキリスト教書籍の刊行を特に重大視し始めたのは、1791年、洪樂安による次の書簡がきっかけとなっている。洪樂安は蔡濟恭(1720 - 1799)宛に「…昔之畏憚邦禁、暗室屯聚者、今則白日恣行、公肆播傳、昔之蠅頭細書、十襲囊篋者、今則肆然刊行、頒諸京外…。」(昔は隠れて筆写して奥に隠していたが、今では堂々と本を刊行するまでになった)(『正祖実録』卷33)という書簡を送った。朝廷での調査の結果、書籍の刊行事実は確認されなかったが、この書簡がキリスト教徒らを迫害した「辛酉迫害」の発端となった¹⁰。辛酉迫害で逮捕された金義浩は、1800年正月に「冊板に関して推尋するために宋再紀のうちに訪問した際に黄嗣永を見た」(裴賢淑、1981、p.13)と自白していることから、少なくとも1800年には木版でキリスト教の書籍が刊行されていたと推測できる。

キリスト教を大衆に普及させるためにはハング

ルの教理書が必要であった。そのため、宣教活動と翻訳事業・翻訳本の刊行とは同じ事業であった。哲宗10年(1859)にはキリスト教神父ベルネ(J. S. Berneux、漢字名・張敬一)によってソウルに木板印刷所が設置され、朝廷の弾圧をかいくぐって教理書などを刊行した。

1866年にキリスト教徒を迫害した「丙寅教難」の時に逮捕された崔炯は、5年の間キリスト教書籍を出版してベルネ主教に送り、ベルネ主教はこれらの書籍を表記して各所に送ったと陳述した。崔炯はベルネ主教から出版資金を受けてキリスト教書籍を出版しており、書籍の配布状況は知らないと言ったが、各地で売買されていた事は否認しなかった。崔炯の出版活動には李哥、丁ベテロ、林致和、全長雲などの人等が関係していた(李중연、2001、p.348)。従って、発行・流通はベルネ主教が担当し、板刻・印刷・製冊等は崔炯らが担当するという組織的な出版活動が行われていたことが確認できる。崔炯が保管していた板木と書籍は推鞠庭で燃やされ、崔炯は「大明律」の条項により全長雲と共に処刑された。朝廷は、売買・配布された書籍に対し、漢城近辺では刑、漢、兩司、五部、捕廳廳等で、地方では八道四都にて回収し燃やすよう命じている。

キリスト教書籍と共に民衆向け異端書籍の出版活動の一軸を形成したのが東学書籍である。崔濟愚により唱道された東学の経典は筆写本として普及したが、1880年『東經大全』の木版が刊行された後、1881年『龍漂遺詞』の刊行、1833年『東經大全』の再刊行へとつながっていった。経典刊行所などでこれらの書籍が刊行されていたことから、東学教文の経典出版活動もキリスト教出版活動に劣らず組織的であった。出版地域も麟蹄・丹陽・木川・慶州など広範囲にわたっていた。『龍漂遺詞』は一度に千余部刊行されるなど刊行部数も多かった。

1892年に崔時亨(1827 - 1898)が各地の教徒に送った「通論文」には「経典を任意で刊行して売買してはいけない」という条項がある。その背景として、当時、東学の経典が大衆に販売される中、営利を目的とした出版社が形成されていたからである。統制にもかかわらず、西学書・東学経典が刊行されて

いたという事実は、農民・賤人・中人・没落両班など下層の文化伝達体系が独自に形成され、支配層の出版の独占を崩していく過程として捉えることができる。

7 おわりに

ある時代・ある社会において、どのようにして「民衆思想」が形成されたのかを考察する場合、当時の人々が、どのような手段によってどのような知識を得ていたかを知ることは重要である。すなわち、その知識形成過程は、技術の進歩、リテラシーの向上、表現の自由、経済的繁栄等によって社会的・歴史的制約を受けているのであり、そのことが、当時の民衆思想の形成にとっての基本的な条件になるからである。

朝鮮後期には封建的秩序が崩れ、構造的矛盾が表面化していた。つまり、身分という封建的社会的障壁、政治・経済の構造的不平等、社会的変化を塞ぐ閉鎖的で画一的な統制政策、支配階層の土地所有問題等は当時の民衆の生活を蝕んでいた。朝鮮後期はこのような社会問題が最も表面化した時期であり、新たな社会秩序が必要とされていた。民衆思想はこうした既存の価値体系・社会秩序から逃れ、人生を新たな方向に向かわせようとする人々によって生みだされた思想として捉えることができる。

こうした時期に行なわれた朝鮮における書籍統制は、政治的・社会的変化を支配層が受け入れなかったことから生じたと言える。統制を受けた書籍は、西学書や讖緯書等の異端邪説、雑書類、唐版本等であった。このような異端雑書類の中でも代表的で最も強力な挑戦者は西学書であった。西学書は知識層によって熱心に講読されていたが、カソリック教会の創設以降、カソリック信仰へと様態が変化するに伴い西学書に対する弾圧が行われた。

また、儒教・仏教に反対し、西学に対抗する民衆宗教として登場した東学は、教祖や学徒に対する官憲による弾圧にも関わらず、西学と同様、民衆向け異端書籍の出版物を通じて普及し、その結果、支配層に対する民衆の抵抗意識や平等意識が育まれ、東学農民戦争等の民衆抵抗運動へと展開していくこと

になった。

このように、朝鮮後期における社会変動は、西学や東学といった民衆思想をめぐって、その思想を「書籍」を通じて普及させようとする勢力と、その「書籍」を統制することで抑制しようとする勢力のせめぎ合いの中から生じてきたと言える。今後は、朝鮮後期における書籍統制の法制度的な仕組みと、それによって具体的にどれだけの書籍が統制され、「読者」から見てどのような変化が生じたのかをより実証的に明らかにしていくことが課題となろう。

注

- 1 当時の賜額書院(国王から扁額・土地・書籍・奴婢等を下賜されその権威が認定されていた書院)の中で、白雲洞書院、玉山書院、易東書院等、書目が確認される書院の目録の内容がほぼ同じであった。
- 2 両班の定義は、法制的にはほとんど明確にされていなかった。両班とは本来、東班(文官)と西班(武官)の総称であり、官僚を意味する言葉であった。しかしこの言葉は、いつしかその意味が拡散し、長きにわたって官僚を輩出していない家門の者であっても、在地社会では両班と認知されることがあった。宋俊浩によれば両班とは、「法制的な手続きを通じて制定された階層ではなく、社会慣習を通じて形成された階層であり、従って両班と非両班との限界基準は非常に相対的であり、主観的なものであった。」(宋俊浩、1987 p.37) また、両班には大きく京班(在京両班)と郷班(在地両班)があったが、前者は首都にあってその出目が明らかで、両班と社会的に認定され易かったが、郷班は両班であるべき条件を満たしていなくても、属する地域の状況・慣習によって両班として認められていた。
- 3 韓国特有の唱劇に合わせて歌った民族芸術の一つ。
- 4 壬辰倭亂・丙子胡乱後、行政難により国がその対策として、財力ある平民やノビ等から金銭を取り身分を昇格させた。没落両班の戸籍売買も日常的に行われていた。18世紀に既に両班という言葉自体が漢陽の商人間の呼称になっていた。更に、漢陽では身分に関係なく経済的に裕福な人々は両班層の服装をしていた。つまり、朝鮮後期には事実上身分制度の意味は失われていた。(韓沼勳、2001、p.327)
- 5 韓国史では、李朝の思想界の流れを終始一貫して「性理学」(宋明理学)という用語を用いて論じている。ただし、李朝時代には17世紀、西人派に属する宋時烈(ソン・シヨル)を中心に起こった朱子学絶対主義や、朱子学より北宋の学者の影響を受けた徐敬徳(ソ・キョンドク)らが現れるなど、思想的な流れが多様だったにも関わらず、これらが全て「性理学」という概念でまとめられていることが多く、本稿でもそのような意味で使用している。
- 6 朝鮮時代の外官職。文官の従二品。
- 7 一般的に「聖経直解」とされている。
- 8 正祖15(1791)年に全羅道珍山で両班である尹持忠と彼の従兄弟である權尚然が尹持忠の母の死後神主を燃やし祭祀を廃止し、カソリック系の祭礼を行った事件。
- 9 「外奎章閣形止案」正祖19年
- 10 辛酉迫害当時、刑曹に押収され焼却された西学書は120種117巻199冊であり、そのうちハンゲル本は83種111巻128冊、漢文本は37種66巻71冊であった(趙珧、1988、p.91)

参考文献

- 井上秀雄『韓国・朝鮮を知るための55章』、明石書店、1993年。
姜在彦『朝鮮近代史』、平凡社、1998年。
姜在彦『西洋と朝鮮 その異文化格闘の歴史』、文芸春秋、1994年。
任正ヒョク編『朝鮮の科学と技術』、明石書店、1993年。
朴垠鳳著、清水由希子訳『わかりやすい朝鮮社会の歴史』、明石書店、1999年。
- (韓国語文献)
姜惠英「朝鮮後期の書籍禁圧에 대한 연구」、『書誌学研究』、書誌学会、1990年。
高柄翊「外国에 대한李朝韓国人의 觀念」、『百山学报』8、백산학회、1970年。
金斗鍾『韓国古印刷技術史』、탑구당、1981年。
前田恭作著、安春根訳『韓国板本学』、범우사、1985年。
閔丙河「朝鮮時代の書院教育」、『大東文化研究』17、1983年。

- 邊太燮『韓国史痛論』、삼영사、1986年。
夫吉萬『朝鮮時代坊刻本出版研究』、서울출판미디어、2003年。
裴賢淑「17、8世紀에 伝來된天主教書籍」、『教会史研究』、第3輯、1981年。
百운관(ウングァン)・夫吉萬『韓国出版文化變遷史』、図書出版타래、1992年。
百樂濬「朝鮮의西洋文化輸入經路」、『新東亞』1、1935年。
百樂濬「丙子胡乱과西洋文化의東漸」、『新東亞』4、1935年。
宋俊浩『朝鮮社会史研究』、一潮閣、1987年。
李중연(ジュンヨン)『書籍의運命』、도서출판혜안、2001年。
李춘희(チュンヒ)『朝鮮朝教育文庫에관한연구』、경인문화사、1984年。
李元淳「西洋文物漢訳西学書의 伝來」、『韓国史』14、국사편찬위원회、1975年。
李元淳『韓国天主教会史研究』、韓国教会史研究所、1986年。
李晔光『芝峰類說』、第二卷、外国條。
林동건(ドンゴン)「韓國原始宗教史」(1)、『韓国文化史大開』VI、高麗大学、1970年。
鄭형우(ヒョンウ)『朝鮮時代書誌史研究：朝鮮後期文教施策과書籍編纂事業』、韓国研究총서47、韓国研究所、1983年。
趙珧『朝鮮後期天主教史研究』、高麗大学民族文化研究所、1988年。
崔韶子「西学關係漢文書가中国・朝鮮의士大夫에게미친影響」、『東西文化交流史研究』、삼영사、1987年。
韓동면(ドンミョン)「朝鮮初書籍出版에關한一考」、『박성봉教授還曆記念論』、경희대、1987年。
韓沽劬『韓國通史』、을유문화사、2001年。

(古文史料)

- 李晩采(編)『開術編』、卷2。
『日省録』正祖11年4月27日、甲子條。
『外奎章閣形止案』、正祖19年。
『世祖實録』、卷7、世祖3年5月、戊子條V7。
『成宗實録』、卷1、成宗即位年12月、戊年條V8。
『正祖實録』、卷26、正祖12年8月、辛丁卯條、V46。
『正祖實録』、卷33、正祖15年10月、辛未條、V46。
『睿宗實録』、卷7、睿宗元年9月。

